

## 三島由紀夫のこと

昭和二十一年十一月十七日午後二時から、成城学園素心寮で、「蓮田善明を偲ぶ会」を催すことになった。『文藝文化』同人の一人蓮田善明が、終戦直後の八月十九日、マレー半島ジョホールバルで自決してから、ほぼ一年三ヶ月の日子が経過していた。戦後の不安定な社会状況の中で、住居もおたがいに確かめるすべもないような時代であったから、案内状を出した先輩・知人も限られていた。参会者は、桜井忠温・中河与一・阿部六郎・今田哲夫・三島由紀夫の諸氏、それに主催者側の同人三人（栗山理一・池田勉・私）を加えて、総員八名に過ぎなかったが、故人を知ること深く、思うことまた篤き人ばかりで、その点からいえば、まず集まりうる自然の顔ぶれであったと思う。

折から朝来の時雨ようやく上がり、薄雲を透してさす光が、前庭に散りしく落葉にほのかに映えて、故人を偲ぶにふさわしい日であった。黄菊に飾られた遺影の前で、自決前後の事情につき、私が関係者から聴取しえたところを報告し、そのあとで、こもこも感懐を述べあった。遠く熊本

の郷里にあって、この会に出席しえない遺族のためにと用意された冊子に、めいめい追悼の言葉と氏名を誌したが、二十一歳の最年少者であった三島君は、つぎのような詩句を書きつけた。墨痕淋漓と評するにふさわしい見事な染筆であった。

古代の雲を愛でし

君はその身に古代

を現じて雲隠れ玉

ひしに われ近代

に遺されて空しく

鬚鬚の雲を慕ひ

その身は漠々たる

塵土に埋れんとす

三島由紀夫

「古代の雲を愛でし」といったのは、蓮田に「雲の意匠」と題する評論のあるのを思い出していることであろう。これは、第二次応召間際に出版された『神韻の文学』の最後に収められたもので、故人の精神の昂揚がそのまま高い格調をなしたような文章である。もとより実証も行きとどき、

彼の最後の心懐が託された卓論である。「その身に古代を現じて雲隠れ」た蓮田を、「鬢髻の雲を慕ひ」と追想した三島君のその後の心の歩みは、だんだん蓮田氏に似てくる、と私にも言い、他人にもごく自然に語るような状況になっていった。三島君の自決を知った時、すぐ脳裡に閃いたのは、蓮田のことであった。

十六歳の平岡公威少年が、三島由紀夫のペンネームを初めて用いて、われわれの雑誌『文藝文化』に小説「花ざかりの森」を発表した時、蓮田は編集後記で、つぎのように推称した。

「花ざかりの森」の作者は全くの年少者である。どういふ人であるかといふことは暫く秘しておきたい。それが最もいいと信ずるからである。若し強ひて知りたい人があつたら、われわれ自身の年少者といふやうなものであるとだけ答へておく。日本にもこんな年少者が生れて来つつあることは何とも言葉に言ひやうのないよろこびであるし、日本の文学に自信のない人たちには、この事實は信じられな位の驚きともなるのであらう。

この年少者の作者は、併し悠久な日本の歴史の請まをし子である。我々より歳は遙に少いがすでに成熟したものの誕生である。此作者を知つてこの一篇を載せることになつたのはほんの偶然であつた。併し全く我々の中から生れたものであることを直ぐ覺つた。さういう縁はあつたのである。……

ここに書かれてあることは、同人全員の思いの適切な代弁であるが、同時に蓮田自身が、この「天才」少年をどのような心で迎えたかの消息も、この文章からうかがうことができる。その真意をだれよりも敏感にとらえ、感動したのは、外ならぬ三島君であったであろう。そのことは、昭和十九年十月に出版された最初の小説集『花ざかりの森』の「跋に代へて」の中で、『文藝文化』誌上に初めて作品が載ったことにふれて、特に蓮田を名ざして感謝の言葉を述べていることから知られる。

敗戦が日本人にもたらしたものは何であったか、それは各人各様であったであろうが、愛する若者や得がたい親友を戦争で喪い、荒涼たる祖国の現状を前にした私にとって、三島由紀夫の健在が、唯一の心の灯となった。その灯は、彼の死にいたるまで、私の歩む道を照らしつづけてきた。

三島君は、折目正しく、終始私を師と呼んでくれたが、そのことを私は、もったいなくも、おおけなくも思っている。教室の黒板を背にするか、前にするかで、師弟の關係が成り立つというのならば、私が彼の師ということになるのであろうが、逆に私は、彼を文学と人生の師と心に仰ぎつづけてきた。

そのことを、感謝をこめて、ここにはっきり告白することができる。

蓮田善明亡きあと「慕ひ」つづけた「靨翳の雲」に、今、三島由紀夫は自らの身を隠した。そ

れは、輝やかしい四十五年の生涯に、それにふさはしい完結を、自らの意志に従って与えたことになる。

三島君が、その死に至るまで、私の心に灯を点じつづけてくれたことは、別の言葉でいえば、私に人生の課題を与えつづけてくれたことでもある。今や、彼の死は、祖国の歴史と伝統にかかわる巨大な課題を私に与えてくれた。身戦おのく思いで、私はそれを受けとめた。同時に、余生をかけて、この課題を考えつづけ、若い人たちにも語り伝える責務を感じている。

それにしても、夙く蓮田善明に後れ、伊東静雄に後れ、今又三島由紀夫に後れて、老残の身をひとり「塵土」にさらすことの寂しさ。深夜、自室に独りある時など、せんすべきもない思いにさいなまれるのである。八月二十五日記

(四六・二)